

点字ブロック ～日本人が発明した世界のスタンダード～

2021.10.4 校長 西谷 秀幸

皆さんは、こういうものを見たことがありますか。これは、「点字ブロック」といいます。歩道や駅のホームなどに付けられていますね。

誘導ブロック
(線状ブロック)



警告ブロック
(点状ブロック)



まっすぐの線だけのものと丸いブツブツがあるものと、大きく2種類ありますが、それぞれどういう意味があるのでしょうか。



線がある方は「その方向に進む」という意味で、丸いブツブツがある方は「止まって注意して」という意味があります。

先週、4年生が目隠しをして白い杖をもって歩く学習をしていましたが、目の不自由な人たちは、歩くときに何があるか分からないと怖いので、「点字ブロック」の上を白い杖で軽くたたいたりしながら、歩いているのです。

つまり、目が不自由な人にとって、「点字ブロック」は、自分の命を守ってくれるとても大事な印で、これがあるから一人で外に出かけることができるのだそうです。

では、この「点字ブロック」は、どこの国の人が発明したと思いますか。

- ①日本人 ②フランス人 ③ドイツ人 (正解は、日本人)

「点字ブロック」は三宅精一さんと弟の三郎さんが発明し、今から54年前の1967年に目の不自由な人たちが通う岡山県の盲学校の横断歩道の近くに、世界で初めて設置されました。そして、20年前の2001年に今の形に決められ、今では、日本だけでなく、世界中でも使われるようになりました。インスタントラーメンやQRコードと同じように、「点字ブロック」も日本人が発明し、世界中で使われているのです。

しかし、困ったことがあります。実は「点字ブロック」の上に、自転車が置かれたりしていることがあるのです。これでは、目の見えない人たちは、安心して外を歩くことができませんね。それどころか、ぶつかって怪我をしたり、大事な白い杖が折れてしまったりしてしまいます。



また、校長先生が、駅で目の不自由な人を見かけたとき、小学生が友達とおしゃべりをしながら、前を見ずに「点字ブロック」の上を歩いてきて、目の不自由な人にぶつかりそうなことがありました。

歩きスマホをしていてぶつかりそうになる大人も多いそうで、中には「危ないから一人で歩くんじゃねえ！」と文句を言ってくる人もいるのだそうです。

ちなみに、目の不自由な人に「今、一番困っていること」を聞いたところ、「信号が赤なのか青なのか、見えないので分からないこと」「ホームドアのない駅が怖いこと」なのだそうです。想像してみてください。皆さんの目が見えなくなり、赤信号なのに青だと思って渡ってしまったら…。駅のホームから落ちてしまったら…。想像しただけで怖いですね…。2年前には、目の見えない人が間違って駅のホームから落ちて亡くなってしまったというニュースが2件もありました。

もし、目の不自由な人を見かけたら、勇気を出して「何か手伝いましょうか」と声をかけたり、「信号が青になりましたよ」などと、教えてあげられたりできると良いですね。

これで朝会のお話を終わります。

(裏面に「先生方へ」があります)

〈先生方へ〉

10月になり、本当に久しぶりに緊急事態宣言が解除されました。それに伴い、再開できる教育活動も多々あります。とはいえ、決して気を緩めることなく、基本的な対策を徹底していきましょう。

さて、先日、4年生が校内で目隠し体験をしていたこともあり、今回は、子供たちが知っているようで、あまり知らない「点字ブロック」にてついで話題にしました。

点字ブロックも、実は日本人が発明したものであり、オリンピック・パラリンピック教育として話をしてきた「世界にほこる日本の技術」にもつながります。ピクトグラム、QRコード、インスタントラーメン…と話してきましたが、子供たちには、日本文化に誇りをもてる人に育ってほしいと思います。また、我々健常者のマナーや視覚障害者の立場にたって物事を考えていくことの大切さについても話題にさせていただければと思います。各学年で実態あわせて、補足をしてください。

【資料】 日本が生んだ発明は世界のスタンダードへ

道を歩いていると何気なく目にする点字ブロック。視覚障害者の方が足裏や白杖の先端をつかって地面の触感を認識し、安全に歩行ができるようにサポートするための点字ブロックが生まれたのは、実は日本だったということを知っているだろうか？歩行者の多い地域や電車、地下鉄などのプラットフォームでも見かける点字ブロックは、今や世界のスタンダードとして広く認知されている。

点字ブロックを考案したのは、1960年代に岡山県岡山市で自営業を営むかたわら、発明家としても活躍していた三宅精一という男性。ある日、白杖を持った視覚障害者の人が歩道を横断しようとする際に、車が勢いよく目の前を走り去るといった危険な場面を目にした精一氏は、「視覚障害者の安全な歩行」という課題について考えるようになった。(中略)

精一氏は、「視覚障害者が人間としての自立をするために、単独安全歩行を支えるシステムを日本全国に導入する」という目標を掲げ、残りの人生をかけて追い求める決心をする。精一氏のアイデアを形にする大役を担ったのは、当時建築会社に勤務していた弟の三郎氏で、ここから三宅兄弟による壮大なプロジェクトが始まる。

当時から「点字〇〇」という言葉は視覚障害者を対象としているという考えが普及していたため、突起物をつけたコンクリートブロックは「点字ブロック」と命名された。記念すべき点字ブロック第1号は、1967年、岡山県立盲学校の近くの横断歩道に設置。これは日本初はもちろんのこと、世界でも初めての点字ブロックだった。誕生間もない点字ブロックは、世界各国の専門家からも高い評価を得たが、(中略)世界でもトップクラスの経済大国にのし上がった当時の日本は経済の発展が第一で、福祉制度を国をあげて支えていくという考えには至らなかった。

初の点字ブロックが設置されてから3年後の1970年、高田馬場一帯に点字ブロックを採用したいとの連絡が舞い込む。周辺は日本盲人センターや日本点字図書館などの盲人施設が多く、東京都は同年、高田馬場駅東側一帯を「交通安全モデル地区」に指定し、都道府県レベルでの初のプロジェクトを立ち上げたことにより、その後、点字ブロックは地方都市へも広がっていった。(中略)

点字ブロックの発案者である三宅精一氏の死後、意志を受け継いだ弟三郎氏は、視覚障害者にとって本当に必要な点字ブロックの研究と発表を続け、ついに2001年、点字ブロックは三郎氏を含めた委員会監修の元、日本工業規格(JIS)によって形が規定された。二人三脚でJIS化まで漕ぎ着けた点字ブロックは、現在も各自治体の条例にしたがって設置され続けている。さらに2012年には点字ブロックの国際規格は日本のJISに基づいて定めると決定され、三宅兄弟が生み出した点字ブロックは世界のスタンダードとなった。視覚障害者の安全歩行を支える仕組みを作りたいという三宅兄弟の熱い気持ちが、今では世界の人々を導く指針となっている。

日本では今や全国各地至る所で点字ブロックを目にする。点字ブロックの存在が当たり前になってきた今だからこそ、点字ブロックがそこに設置されている意味も今一度考える必要があるのではないだろうか。点字ブロックの上に駐車、駐輪などをしたり荷物を置いたりすると、視覚障害者の人は道を塞がれてしまう。また点字ブロック上に置かれているものに躓いて怪我をしまったり、白杖を折ってしまったというトラブルも日常的に起きている。視覚障害者の方が安心して歩けるように、健常者が取るべきマナーも改めて考え、お互いが過ごしやすい環境を整えることが日本のさらなる社会福祉の発展につながるのではないだろうか。(https://tabizine.jp/2018/11/17/211051/)